

小学校英語活動における英語絵本の活用に関する研究

—児童の発達段階に応じた英語絵本の活用—

大川陽子 (OKAWA Yoko)

徳島市福島小学校

要約

近年わが国では外国語教育の必要性がますます重視され、改革・改善が進められようとしており、今後小学校で英語活動に取り組むにあたり、児童に身につけさせたい資質能力を明確にし、英語活動と他教科との関連性や児童の発達段階にも配慮しながら、児童の成長を促すような指導計画を作成し、児童の興味・関心に合った教材を開発していく必要性を感じる。本稿では、小学校英語活動における補助教材としての英語絵本の可能性を探り、低・中・高学年児童の発達段階に応じた英語絵本の効果的活用法を提案する。

尚、本稿では、小学校第5、6学年において必修化されている英語活動を「外国語活動」とし、第5、6学年も含む小学校全学年における英語活動を「英語活動」と統一して述べる。

(キーワード：小学校英語活動，英語絵本，発達段階)

1. はじめに

1.1 研究の背景及び動機

平成20年1月、中央教育審議会から、「社会や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能な発展に向けて国際協力が求められているとともに、人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つとなっている」と答申されたことを受け、文部科学省は平成20年3月8日に小学校学習指導要領を改訂し、小学校第5学年及び第6学年に外国語活動が位置づけられた。その後、平成23年度より、新学習指導要領が施行され、小学校第5、6学年において外国語活動が完全実施されることとなった。また、平成25年10月23日付読売新聞朝刊において、外国語活動が小学校第3学年から実施されること、第5学年からは正式な「教科」として扱われ、週3回の実施が想定されている

ことが報道された。今後、教科書の検定基準や評価方法などを検討し、中教審の議論を踏まえて学習指導要領の改訂に着手し、2020 年までの実施を目指すとのことである。

このように、近年わが国では外国語教育の必要性がますます重視され、改革・改善が進められようとしており、今後小学校で英語活動に取り組むにあたり、児童に身につけさせたい資質能力を明確にし、英語活動と他教科との関連性や児童の発達段階にも配慮しながら、児童の成長をうながすような指導計画を作成し、児童の興味・関心に合った教材を開発していく必要性を感じる。

小学校英語活動に取り入れたい効果的な教材の一つとして英語絵本が考えられる。英語絵本は、多くの可能性を秘めた教材であり、小学校英語活動に絵本を活用することにより、子ども達が興味・関心を持って学習に取り組むことができ、学習指導要領において求められている児童に身につけさせたい資質や能力を自然に楽しみながら獲得することができるのではないかと考える。畑江（2012）は、絵本の読み聞かせは言葉に限らず子どもの成長に大きな役割を持ち、その絵本の持つ魅力や学習効果が注目され始め、英語活動内での活用についても様々な実践報告や研究が発表され始めていると述べている。また、樋口・金森・國方（2005）は、日本の小学校における英語絵本の活用について次のように述べている。

絵本のすばらしさは、年齢が低いほど、英語圏の同じ年齢の子どもたちを対象とした内容の単純な本を扱うことができることであろう。年齢が高くなるにつれ、英語に触れる機会が少ない日本の子どもたちは、英語圏の同じ年齢の子どもたちが楽しむ本とは差が出てくることは避けられない。とはいえ、1 年生から 6 年生まで、それぞれの年齢の子どもたちがおもしろいと思える絵本を探し出すことも容易である。

このように英語絵本は、どの発達段階の児童にとっても興味を持って取り組むことができる教材であり、工夫次第で様々な活用が可能となる優れた教材である。しかしながら、学年によって発達段階に著しい違いがみられる児童においては、絵本の選択や活動内容等を考慮しなければならないと考える。

現在高学年においてのみ必修化されている外国語活動であるが、低・中学年においては、学校裁量の時間あるいは総合的な学習の時間に国際理解に関する学習の一環として外国語を扱うことは可能である。しかし、平成 23 年度施行の新学習指導要領にない低・中学年での英語活動を今後どう扱うのかは現場でも問題となっており、地域や学校によりその時間数は大きく異なっている。実際筆者の前任校でも、新学習指導要領が開始される以前には低・中学年においても月に 1 時間ほど実施されていた英語活動が、新学習指導要領の開始に伴い全く実施されなくなってしまった。今までに積み上げたものを無駄にしないように低・中学年でも引き続き英語活動を行いたいという意見もあったが、カリキュラム上それもかなわない状況であった。

筆者は、これまで低学年の児童を担当することが多かったが、英語活動では ALT(Assistant Language Teacher)が T1(Teacher 1)として指導をし、筆者は T2(Teacher 2)として関わっていた。その際に、児童が楽しそうに身体全体を使いながら英語の歌を

歌ったり、耳から聞いた ALT の発音をそっくりまねて表現したり、習得した英語のフレーズを用いて友達とのコミュニケーションを楽しんだりしている姿を見て、低学年の子どもの聴解能力や言語習得能力の高さを実感していたので、低・中学年の児童に英語活動の機会が与えられなくなったことが非常に残念であった。

伊藤（2010）は、児童の外国語学習最適期について、「外国語学習および異文化学習の最適期は 8 歳頃までと言われている。2011 年から 5, 6 年で必修になるが、できるだけ低学年から、学校裁量の時間や『総合的な学習の時間』を活用して音声を中心にした英語の予備学習ができれば望ましい」と述べている。全体的処理能力が高く、自然な言語習得が可能な低学年から英語の音声に触れることは、英語学習において有効であり、小学校 6 年間で継続性を考慮したカリキュラムを作成し、系統立てて英語活動に取り組むことにより、中学校での英語教育へのスムーズな接続を図ることが可能になるのではないかと考える。現行の学習指導要領の下では、低・中学年においてまとまった時間を英語活動のために確保することは難しいが、朝や帰りの活動等で英語の歌を歌ったり、英語絵本の読み聞かせをしたりして、英語に触れる機会を持つことは十分可能である。今後外国語活動の実施学年が早期化されることを踏まえ、各学年の発達段階に合った指導法や教材開発の研究に取り組んでいく必要があると考える。

1.2 研究目的

本研究では、英語絵本の教材としての可能性や効果的な指導法を探り、小学校低・中・高学年での英語活動における、発達段階に応じた英語絵本の効果的活用法を調査・考察することにより、積極的な英語絵本活用を提案したいと考える。

具体的に、低・中・高学年児童の発達段階に応じた英語絵本活動のために、使用絵本の選本、時間配分、活動内容等を含む計画的・継続的な指導計画を立て、英語活動における英語絵本の効果的活用法を提案することを研究目的に据える。

2. 先行研究

2.1 絵本の特性と小学校英語活動における絵本活用の意義

絵本は、文と絵が一体となって響き合い物語を表現し、ページをめくってストーリーを楽しむ絵本は、子どもたちの想像力を育み能動性を引き出してくれるメディアであり、人生における喜びや感動を読み手に伝えることができるコミュニケーション手段となり得る（香宗我部・鈴木，2012；生田・石井・藤本，2013；松居，2003）。

読み手と聞き手が心を通わせながら物語体験を共有する絵本の読み聞かせは、子ども達の情緒的発達を促し、よい絵本の中での優れた文章との出会いによって、豊かな言葉の体験をし、言語に対する感覚や思考力や表現力を培っていくことができるのである。さらに、コミュニケーションやインタラクションの機会が得られるという絵本の読み聞かせは、子どもたちの自己形成や周囲との関係作りやコミュニケーション能力の育成に重要な役割を果たすのではないかと考えられる。

子どもたちが楽しみながら絵本の中で異文化体験をし、意味のあるストーリーの中で英語の音声にふれることができることから、英語絵本は有効な教材であるといえ

る。英語絵本の読み聞かせを通して、相手の話を聞き取る力や未知語・表現の意味を類推・推測する力、大意をつかむ力を育成し（樋口・大城・國方・高橋，2010），英語活動の中で子どもたちとインタラクションを図りながら英語絵本を活用することによって、子どもたちにコミュニケーションの楽しさを体験させ、コミュニケーションへの積極性を育てることができるのではないかと考えられる。

2.2 児童の発達段階に応じた指導法と英語絵本の活用

低学年児童には、身体を動かしたり、五感を使ったりして、意味を理解する基礎となるさまざまな体験を通して言葉を覚えていくように工夫する必要がある（岡・金森，2009），身近な言語材料を取り上げている絵本や、同じ表現が繰り返し使われる絵本などを選んで、体を動かしながら楽しく英語の音声に慣れ親しませる活動等を設定することが効果的であると考えられる。

影浦（2002）は、中学年の児童は、「ギャングエイジ」の言葉に代表されるように集団での活動を好み、低学年児童のもつ音声への敏感な反応も健在でありながら好奇心も強くなり、グループ単位でのゲームにも熱中して取り組むようになるという。

したがって、中学年児童には、クラスやグループの友達と一緒に発話する活動や友達と協力して一つのものをつくる達成感を味わわせる活動を設定することが望ましく、絵本を使った活動では、グループでの役割読み等の活動を取り入れることが効果的であると考えられる。

思春期にさしかかり、人前での発話に抵抗感や不安感を持つようになる高学年児童には、英語の音に十分慣れさせる活動や題材の中に自己肯定感を育てる教材を配置し、支持的雰囲気の中で安心して学習できる体勢を築くことが大切である（影浦，2002）。知性好奇心や感性を刺激する絵本を選択し、他教科や総合的な学習等と関連を持たせる活動を設定することも効果的であると考えられる。

3. 調査

3.1 調査目的

英語絵本を使った活動が低・中・高学年児童に及ぼす意識変容や学習効果を調査し、低・中・高学年児童の発達段階によって、どのような英語絵本の活用が有効であるかということを検証する。

3.2 調査対象・期間

調査対象は、徳島市内の S 小学校 2 年生児童 27 名，4 年生児童 30 名，6 年生児童 27 名である。調査期間は、平成 25 年 9 月 2 日から平成 25 年 9 月 9 日である。

3.3 研究方法

朝の活動時や授業の始めの 15 分間で、英語絵本を使った活動を各学年計 4 回ずつ実施する。活動前に事前調査を行い、4 回の活動後に事後調査を行う（表 1）。アンケート形式による児童の意欲や態度の変容、及びテスト形式によるリスニング力、スピー

キング力の変化について調査する（表2）。なお、スピーキング調査については個別の調査であり、時間的制限があったため、被験者の人数は全体の約半数となっている。

表1 調査・活動の流れ

事前アンケート調査・リスニングテスト(計15分間) スピーキングテスト(15分間)		
活動① (各学年15分間)	低学年	○教師による読み聞かせ(絵本の中のことばや内容理解を促すような言葉がけやジェスチャーをしながら読み聞かせる) ○児童による部分読み(教師と一緒に声を合わせて読む)
	中学年	○教師による読み聞かせ(絵本の中のことばや内容理解を促すような言葉がけやジェスチャーをしながら読み聞かせる) ○児童による部分読み(教師と一緒に声を合わせて読む)
	高学年	○教師による読み聞かせ(絵本の中のことばや内容理解を促すような言葉がけやジェスチャーをしながら読み聞かせる) ○児童による部分読み(教師と一緒に声を合わせて読む)
活動② (各学年15分間)	低学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による部分読み(教師と一緒に声を合わせて読む。動作を加えながら読む) ○カルタゲーム
	中学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による部分読み(教師と一緒に声を合わせて読む。グループで協力して声を合わせて読む。)
	高学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による部分読み(教師と一緒に声を合わせて読む) ○カルタゲーム
活動③ (各学年15分間)	低学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による部分読み(好きな動物になって読む。感情を込めて読む)
	中学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による部分読み(グループで協力して声を合わせて読む。感情を込めて読む)
	高学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による部分読み(グループで協力して声を合わせて読む。感情を込めて読む)
活動④ (各学年15分間)	低学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による役割読み(好きな動物になって全体を通して役割読みをする)
	中学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による役割読み(好きな動物になって全体を通して役割読みをする)
	高学年	○教師による読み聞かせ(英語のみ) ○児童による役割読み(グループで協力して全体を通して役割読みをする) ○自分の好きなこと、できることの発表
事後アンケート調査・リスニングテスト(計15分間) スピーキングテスト(15分間)		

表2 調査の詳細

情意面アンケート調査
低・中・高学年の児童を対象に同一のアンケート用紙による調査を行った。事前アンケートは17項目とし、事後アンケートは事前アンケートの17項目に4項目加えて21項目とした。質問内容は、「英語学習経験の有無」「英語絵本経験の有無」「英語や外国の文化に対する興味・関心」「外国語活動で教師や友達と関わることにに対する興味・関心」「英語絵本に対する興味・関心」「授業での英語絵本の活用法について」「英語絵本を使った活動について」等とした。
リスニング調査 (8点満点)
低・中・高学年でそれぞれ扱った絵本の中から、本の中にある英文を各学年8問ずつ選出し、一斉調査で聞き取らせた。選択形式により英文に合う日本文を選ばせ、選択肢は、「わからない」を含めて4択とした。
スピーキング調査 (15点満点)
低・中・高学年でそれぞれ扱った絵本の中から、本の中にある英文を各学年5問ずつ選出し、絵本の絵と英文を提示しながら、教師が英文を言った後に続いて同じ英文を発話させた。個人調査を行った。録音をしたものを、「正解語彙数」「発音(アクセント)」「流暢さ(リズム)」の3つの項目に従って5段階評価をした。

3.4 使用絵本

絵本は児童の発達段階を考慮して選本した。低学年には、*From Head to Toe* (Eric Carle) を使用した。児童に身近な動物、動作、体の部分の英語を学び、身体表現をしながら活動ができ、好きな動物になって役割読みができる。中学年には、*Who ate all the cookie dough?* (Karen Beaumont) を使用した。繰り返しが多く、リズムカルな英語で構成され、最後にオチがあるストーリーを楽しむことができる。様々な動物が登場するので、グループでの役割読み等の活動にも適している。高学年には *I Like Me!* (Nancy Carlson) を使用した。シンプルな英文で大らかな絵も魅力的である。自己肯定感を育てたり、まわりの友だちの良さに気づいたりすることができる。

3.5 結果と考察

3.5.1 情意面調査結果

低・中・高学年児童の活動後の情意面調査結果のうち、今回は紙面の都合上、特徴的な結果の出た「英語絵本を使った活動は楽しかったですか」、「英語絵本を使った活動は簡単でしたか。難しかったですか」、「絵本の内容が分かりましたか」の3項目を取り上げたい。

「英語絵本を使った活動は楽しかった」の項目では、「楽しかった」と「どちらかといえば楽しかった」の合計は、低学年 92.6%、中学年 96.7%、高学年 57.7%である（表3、図1）。次に、「英語絵本を使った活動は簡単だったか難しかったか」の項目では、「簡単だった」と「どちらかといえば簡単だった」の合計は、低学年 55.5%、中学年 63.4%、高学年 38.5%である（表4、図2）。「絵本の内容がわかった」の項目では、「わかった」と「どちらかといえばわかった」の合計は、低学年 77.7%、中学年 93.4%、高学年 69.3%である（表5、図3）。この結果から、中学年児童が最も絵本活動を楽しみ理解度が高かったといえる。

表3 「英語の絵本を使った活動は楽しかったですか」に対する回答結果

	2年	4年	6年
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
楽しかった	24(88.9)	26(86.7)	8(30.8)
どちらかといえば楽しかった	1(3.7)	3(10.0)	7(26.9)
どちらでもない	0(0.0)	1(3.3)	4(15.4)
どちらかといえば楽しくなかった	0(0.0)	0(0.0)	4(15.4)
楽しくなかった	2(7.4)	0(0.0)	3(11.5)
合計	27(100)	30(100)	26(100)

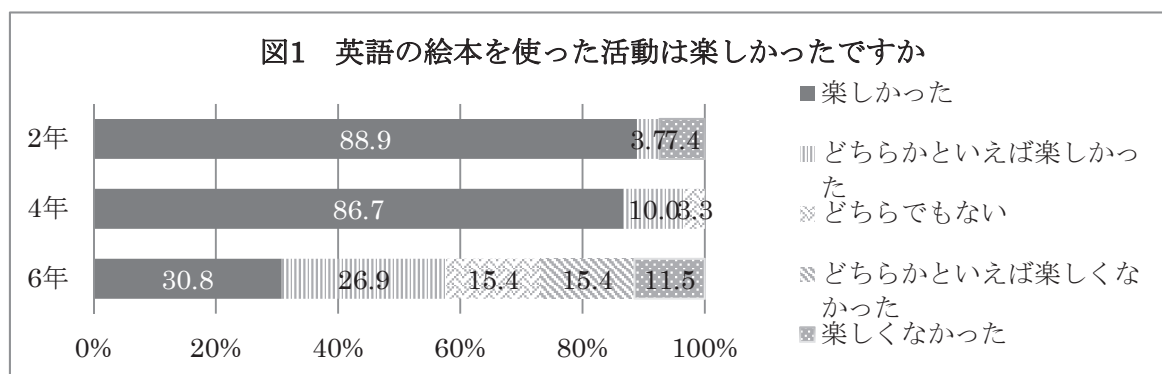


表4「英語の絵本を使った活動は簡単でしたか。難しかったですか」に対する回答結果

	2年	4年	6年
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
簡単だった	10(37.0)	11(36.7)	6(23.1)
どちらかといえば簡単だった	5(18.5)	8(26.7)	4(15.4)
どちらでもない	3(11.1)	4(13.3)	6(23.1)
どちらかといえば難しかった	4(14.8)	4(13.3)	5(19.2)
難しかった	5(18.5)	3(10.0)	5(19.2)
合計	27(100)	30(100)	26(100)

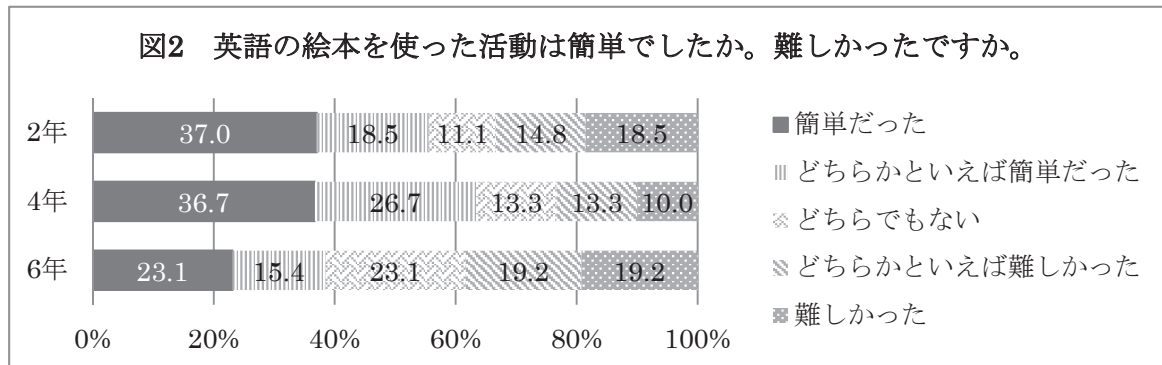
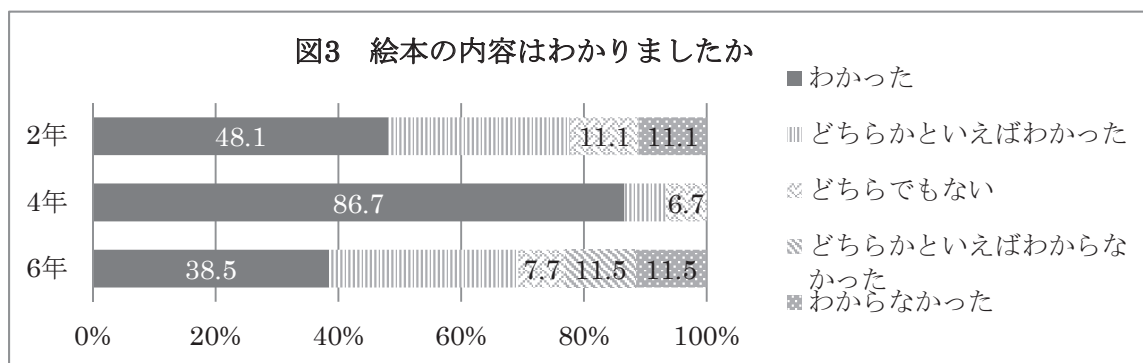


表5「絵本の内容はわかりましたか」に対する回答結果

	2年	4年	6年
	人数(%)	人数(%)	人数(%)
わかった	13(48.1)	26(86.7)	10(38.5)
どちらかといえばわかった	8(29.6)	2(6.7)	8(30.8)
どちらでもない	3(11.1)	2(6.7)	2(7.7)
どちらかといえばわからなかった	0(0.0)	0(0.0)	3(11.5)
わからなかった	3(11.1)	0(0.0)	3(11.5)
合計	27(100)	30(100)	26(100)



3.5.2 リスニング・スピーキングテスト結果

事前と事後での点数の伸びは、8点満点のリスニングテストでは、低学年は3.45点($t(26) = -7.864, p < .01$), 中学年は4.1点($t(29) = -11.292, p < .01$), 高学年は2.07点($t(25) = -6.429, p < .01$)の上昇が見られた。また、15点満点のスピーキングテストでは、低学年は5.22点($t(15) = -11.172, p < .01$), 中学年は6.73点($t(14) = -8.661, p < .01$), 高学年は3.19点($t(15) = -5.802, p < .01$)の上昇が見られた(表6)。よって、技能面の結果は、全学年

において活動の効果が表れたと言える。また、情意面で最も消極的な結果であった高学年児童も、これらの技能面においては、リスニング、スピーキング共に効果が認められたことには検討の余地がある。

表6 リスニングテスト・スピーキングテスト各学年平均点(事前・事後)

		低学年		中学年		高学年	
		平均値	t値	平均値	t値	平均値	t値
リスニングテスト	事前	2.22	-7.864**	2.93	-11.292**	3.81	-6.429**
	事後	5.67		7.03		5.88	
スピーキングテスト	事前	5.78	-11.172**	7.60	-8.661**	8.56	-5.802**
	事後	11.00		14.33		11.75	

** $p < .01$

3.5.3 考察

中学年において情意面に与える影響が大きかったという結果の背景として、事前調査項目に含めていた「英語学習経験」と「英語絵本経験」の結果を踏まえ次の3点が考察される。

1点目は、学外での英語経験者の割合が低学年（42.3%）、高学年（55.6%）に比べ中学年が最も高い（63.3%）ということである。学外での英語経験の有無は、英語好感や英語学習に対する意欲にもつながっている可能性があると考えられる。

2点目は、英語絵本を10冊以上読んだことがある児童の割合が低学年（7.7%）、高学年（22.2%）に比べて中学年で高い値を示した（30.0%）ということである。中学年児童は、他の学年の児童に比べて英語絵本を読むことに慣れ親しんでいるといえる。このことから、子ども達の英語好感や学習意欲を高めるためには、様々な場で日常的に英語や英語絵本にふれることができる環境作りが大切であるということがいえる。

3点目は、中学年児童の発達段階が英語学習に適しているのではないかとということである。樋口・行廣（2001）は、中学年児童は、学校生活にも慣れて、行動力もあり、いろいろな課題に自主的に取り組もうとする態度も出てくると述べているが、今回英語絵本を使った実践研究を行った際にも、英語学習に対する中学年児童の旺盛な学習意欲を実感した。

これらの結果から、中学年児童は、英語活動や英語絵本活動に対して高い関心を示し、積極的に取り組むことができるという発達段階にあり、先行研究に沿って取り扱った英語絵本の選択や、グループでの役割読み等の活動内容も中学年児童に適しており、情意面において学習効果が上がったのではないかと考えられる。

低学年においては、英語絵本活動が児童の情意面に与える影響は中学年ほど大きくはなかったが、英語絵本活動が、低学年児童の英語活動に対する好感に影響を与えることができたのではないかとということがいえる。したがって、先行研究で述べられていたように、身体表現を取り入れながら、友達と一緒に声に出して読んだり、自分の好きな動物になって役割読みをしたりする活動は、低学年児童の発達段階に適していたのではないかと考えられる。

今回の実践研究では、高学年における英語活動の指導の難しさを実感した。高学年児童に対しては、先行研究に沿って自己肯定感を高めることができる絵本を選択し、自他のよさを認める活動を設定する等の配慮を行ったが、英語絵本活動を行うための

情意面や技能面における基盤作りが十分にできていない状況での短期間の実践であったため、指導の効果が現れにくかったということも考えられる。高学年児童の発達段階においては、意味を理解していないまま英語を発話したり、興味や意義を見出せない英語活動や絵本活動を行ったりすることに対して不安感や抵抗感を抱いてしまうということも大きな要因となっているのではないかと考える。したがって、高学年児童に対しては、絵本の読み聞かせ等で英語の音声に十分に慣れさせる活動や意味理解を促す活動を行った上で、自信を持って声に出して読む活動をさせることが望ましいと考えられる。

一方、技能面であるリスニング・スピーキングテストでは、全学年において英語絵本を使った活動での学習効果が現れているといえる。今後、高学年児童の情意面と技能面における差をうめるためには、低・中学年期から英語絵本等で楽しく英語の音声に慣れ親しませ、高学年期においては、児童の興味・関心に応じた絵本を選択し、児童が意義を見いだせるような活動内容を設定する等、低学年や中学年で学びを高学年の発達段階に応じた学習内容へと深めていくことが重要であると考えられる。

4. 結論および今後の課題

各学年における本実践調査の結果と考察を踏まえて、低・中・高学年児童の発達段階に応じた英語絵本の効果的な活用法について次のように提案する。

- 低学年児童：身体表現を取り入れながら楽しく英語の音声に慣れ親しませ、教師や友達と一緒に声に出して読んだり、役割読みをしたりする活動等を設定することが望ましい。
- 中学年児童：グループ活動を積極的に取り入れ、友達と協力して声に出して読んだり、役割読みをしたりする等、友達との関わりを深めることができる活動を設定することが望ましい。
- 高学年児童：読み聞かせ等で英語の音に十分慣れさせる活動や意味理解を促す活動を行った上で、自信を持って声に出して読む活動をさせることが望ましい。また、題材の中に自己肯定感を育てる教材を配置する等の配慮をし、支持的雰囲気の中で安心して学習できる態勢を築いたり、児童が活動意義を持つことができる課題等を設定したりすることが必要である。

今回の研究調査校においても同様のことがいえるが、英語絵本活用の環境が十分に整っていない学校は少なくないのではないかとと思われる。したがって、今後、図書室や活動室、教室等で児童が気軽に手に取ることができる環境を整えることや、教員が読み聞かせや英語活動で教材として使用しやすい大型絵本や音源付きの英語絵本などの教材を充実させることが必要であると思われる。また、教員研修等で英語絵本の教育的価値や活用意義に対する共通理解を図り、英語活動のみならず、学校教育における様々な教育活動に英語絵本を取り入れた活動を計画的に位置づけ、低・中・高学年

を通して継続的に実践していくことが重要な課題であると感じる。

今回は、15分単位の4回という短期間での実践であり、取り扱った英語絵本も各学年1冊のみであったが、今後児童の興味・関心に合った様々な英語絵本を扱い、児童の実態や教育目的に応じた英語絵本活動を取り入れていくことで、さらなる教育効果が期待できると思われる。したがって、今後も継続的に研究に取り組み、各学年の発達段階に応じた絵本の選択や指導法を探っていく必要があると考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、徳島市のS小学校の全面的なご理解とご協力をいただき、この場を借りて心より感謝申し上げます。また、筆者の修士課程指導教員である鳴門教育大学畑江美佳准教授、データ処理においてご協力をいただいた上越教育大学石濱博之准教授、鳴門教育大学大学院現代課題総合コース萩賢明氏に深く感謝の意を表する。

引用文献

生田美秋・石井光恵・藤本朝巳編著(2013)『ベーシック 絵本入門』京都：ミネルヴァ書房。

伊藤克敏(2010)「小学校外国語学習，国際理解学習における特徴と英語活動への示唆」
樋口忠彦・大城賢・國方太司・高橋一幸 編『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』東京：研究社。

岡秀夫・金森強編著(2009)『小学校英語教育の進め方改訂版—「ことばの教育」—として』東京：成美堂。

影浦攻(2002)『小学校英語活動指導のアイテム小辞典』東京：明治図書出版。

香宗我部秀幸・鈴木穂波(2012)『絵本を読むこと「絵本学」入門』東京：翰林書房。

畑江美佳(2012)「小学校外国語活動における「英語絵本」の活用—コミュニケーション能力の素地を育むために—」四国英語教育学会『紀要』第32号, 17-28。

樋口忠彦・行廣泰三(2001)『小学校の英語教育—地球市民育成のために—』東京：KTC中央出版。

樋口忠彦・金森毅・國方太司(2005)『これからの小学校英語教育—理論と実践—』東京：研究社。

樋口忠彦・大城賢・國方太司・高橋一幸 編(2010)『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』東京：研究社。

松居直(2003)『絵本のよろこび』東京：日本放送出版協会。

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社。

読売新聞(2013)「英語授業小3から」平成25年10月23日付朝刊。